

裁縫お細工物についての一考察

村越 信子

A Study on “Sewing Handicraft”

Nobuko MURAKOSHI

はじめに

ここ東京家政大学博物館では、多くの実習生を受け入れている。実習生は、一週間の間博物館という新しい環境で資料調書の取り方から、資料に関わる梱包、写真撮影、展示方法、さらに拓本の実習、修復の作業まで幅広く学んでいる。そのカリキュラムのひとつに博物館収蔵庫見学が行われる。収蔵庫は博物館の心臓部ともいわれ、その館の柱であり、特徴となるものが大切に保管されている所である。

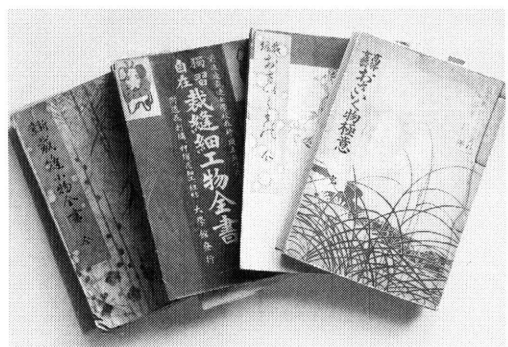
見学は当館の資料の特徴をはじめ、収蔵庫の環境や管理の仕方などを説明しながら順路に沿って廻る。時には白手袋を使用してもらい、実物資料に触ってもらうこともある。実習生にとって緊張の一瞬である。多種多様な資料の中で、実習生が特に興味を示した資料の一つに「お細工物」のコレクションがある。

このコレクションの戸棚を開け、引き出しを取り出すと、熱心に耳を傾けていた緊張の表情が和らぎ感嘆の声が上がる。

そこには、手のひらに載るほどながら、色彩豊かな花や動物、そして人形の形などの、愛くるしい「お細工物」のかずかずが目に飛び込んでくるからである。

「お細工物」とは、ちりめんの端切れを縫い合わせて形作った伝統ある手芸の一つである。明治時代には、女学校の教材にも取り上げられ、女学生たちは作品作りを競い合い、素晴らしい作品群を数多く残している。

東京家政大学博物館に収蔵されているこれら「お細工物」は、東京家政大学の前身である東京裁縫女学校・東京女子専門学校において明治から大正時代にかけて製作されたものと、昭和に入ってから復元した新しい作品を加えた約90点ほどである。また、当時指導教科書として使われていた明治から大正時代に出版された書籍も保管されている。[写真1] 作品の一点一点は、おおよそ6 cm×6 cm×6



[写真1]

cmほどの極小ながら、現代の女子学生の心を捉える伝統ある「お細工物」とは、どのような歴史をもち、盛んに製作された時代背景やどのように生活の中で生かされ、育てられ守られてきたのか、これらの収蔵品を中心に考察を進めたい。

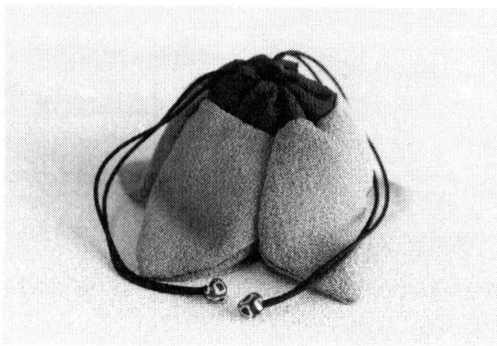
1. お細工物

「細工物とは如何なる意味を含んで居るものであるかと云うに、最も通俗に解釈しますれば、謂ゆる有合せの材料により、自ら工夫を凝らして、種々の物品を作り出すを云ふので、元来此の技は、古より我が国に行はれて居たものであります。けれども概ね閑人の所在なしの仕事のやうに考へられて居たのであります。一たび女子の教育が勃興してより女子自身に責任を自覚するは勿論、延いて家政経済の觀念に富み、且つ美術思想に伴うて、日に月に之が製作を試みらるることの盛んなるは、実に家庭のため將た国家の爲め、祝すべき事と云はねば為らぬ。」¹⁾と1922年（大正11年）に発行された「おさいく物極意」第一章に記載されている。以上のように第一章細工物の要旨の項にて、端的に謂い表わされている。製作することのみに留まらず、美の世界や家政経済にまで及んでいる。

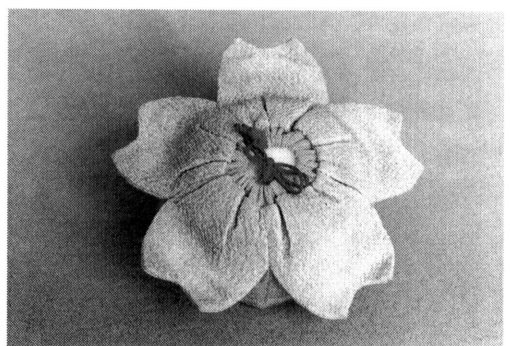
そこから判断して、お細工物とは着物に使った残り布を縫い合わせ工夫を凝らして、折々の花や鳥、人形などの形を作り出し、袋物になったり、装飾して置き物にも仕立てられたもののことを言う。形だけではなく香袋や琴爪を入れる袋として、さらにお鈴台や肘付きなどの実用的なものまで斬新な意匠をこらし、用と美を兼ね備えたものである。

このお細工物は、江戸時代に御殿女中や裕福な家庭の女性から生まれ、何代にも亘った女性たちの間で縫い継がれ、切磋琢磨を繰り返し、完成度を高めてきた素晴らしい伝承作品である。江戸から明治と時代は移っても、ますます盛んになり、明治時代後半には、次々とお細工物の文献が（後述）が出版された。特に、ちりめん（縮緬）の残り布を縫い合わせたちりめん細工は、布の風合いからより好まれ、花鳥風月を題材にして、自然を生活の中に折り込みながら形作った見事な表現力を見る者に感動を与える。

当館に収蔵されているお細工物を中心に次の五つのテーマに分類を試みた。



[写真2]

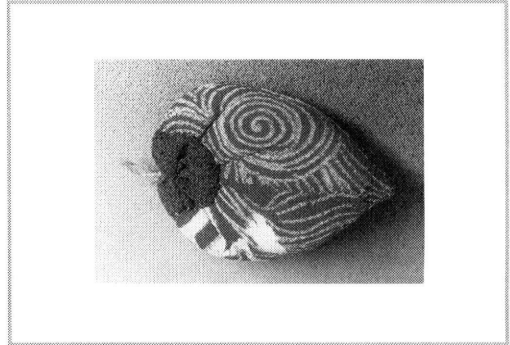


[写真3]

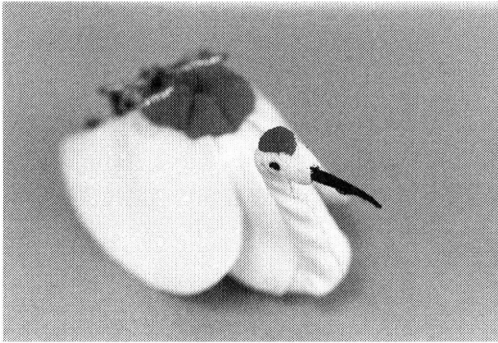
- 1) 花 …… 桔梗、椿、桜、菊、花菖蒲、アヤメ、睡蓮などの花々が用いられている。柿やイチゴ、ほおづきなどの実のものも、季節感とともに、より立体的に仕立てられ、どれも袋として実用の要素も生かされている。[写真2～5]
- 2) 動物 …… 鶴、亀、鯛、海老、おしどりなどめでたさを表す作品が多い。あいにく収蔵品は鶴と海老だけである。犬、猫、兎、鼠、猿、鳥など日常良く目にする動物もモチーフに



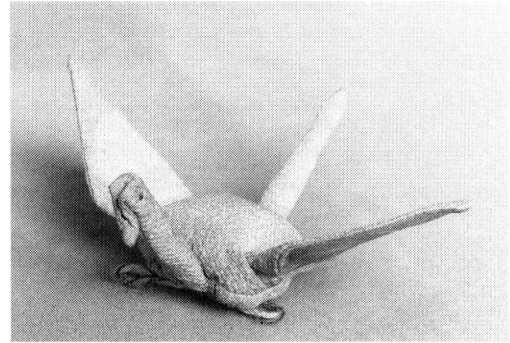
[写真4]



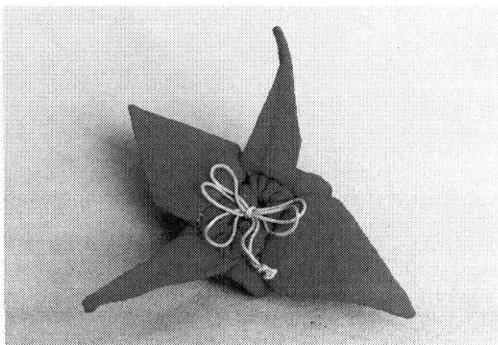
[写真5]



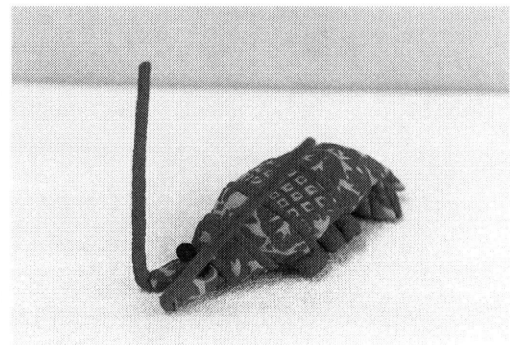
[写真6]



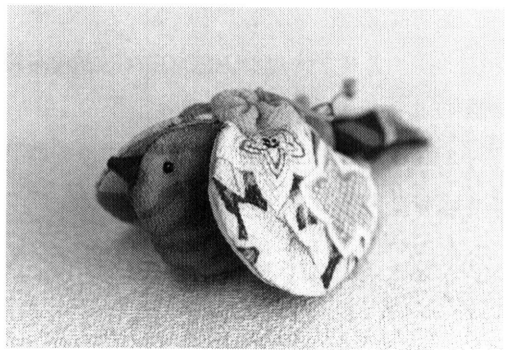
[写真7]



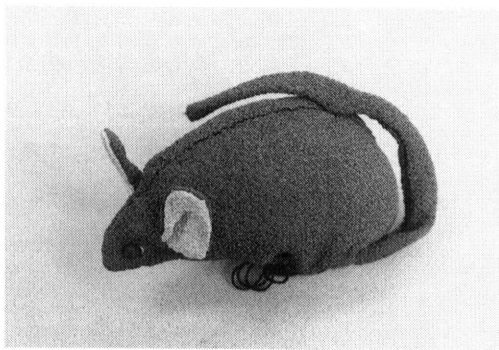
[写真8]



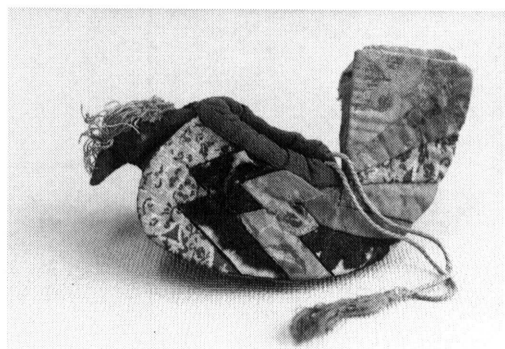
[写真9]



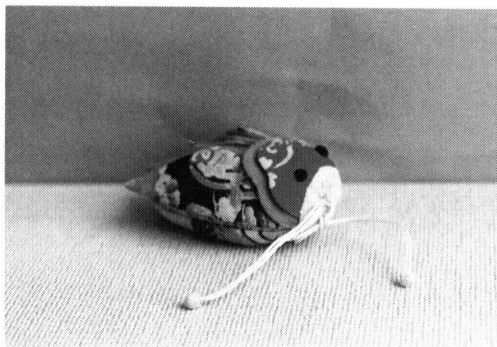
[写真10]



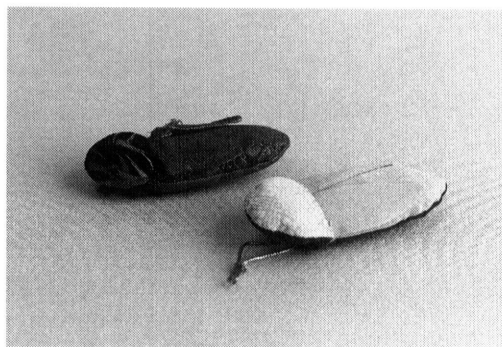
[写真11]



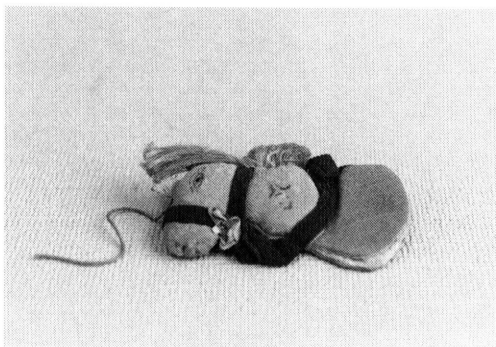
[写真12]



[写真13]



[写真14]



[写真15]

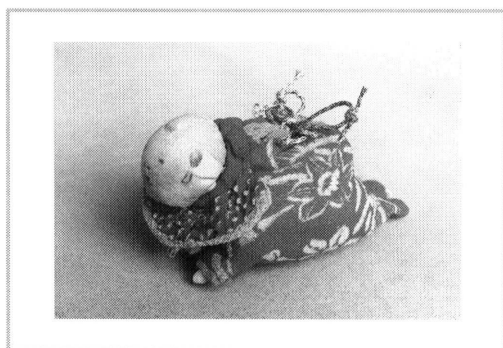
使われて、色や形も多種多様に作られ、愛らしく表現されている。また、金魚や蝉は夏の風物詩である。金魚は室町時代に中国から渡来したもので、文化文政の頃、庶民の間で金魚を飼うのが流行った身近な生き物である。春駒は、江戸時代に流行した子供の玩具の代表であり、馬の首の部分を袋に仕立てあり人気の高いものである。[写真6～15]

3) 人形 …… 赤ん坊の這う姿を形作った這子、唐子、手つなぎ人形、三番叟などがある。い

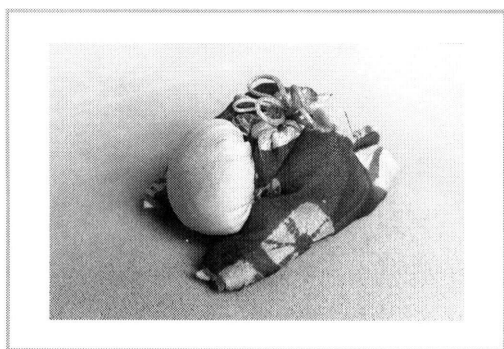
つの時代も人形は、赤子の成長を願い、また、身にふりかかる災難から守るという。この人形のルーツは、遠く平安時代に作られていた「這子」に求められる。お細工物の人形は、子供を守ってくれるという人形の心を、ひと工夫もふた工夫もされて袋物に仕立てられている。[写真16～28]



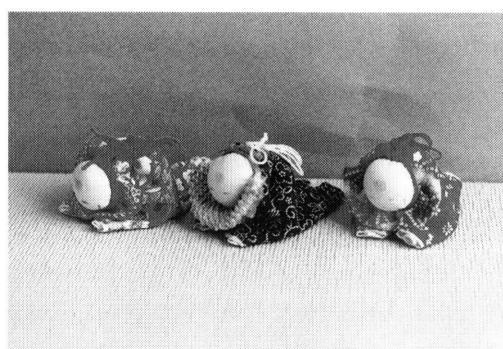
[写真16]



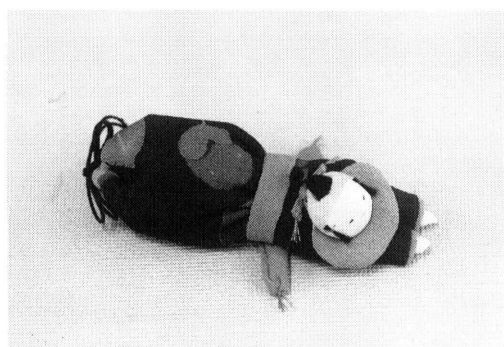
[写真17]



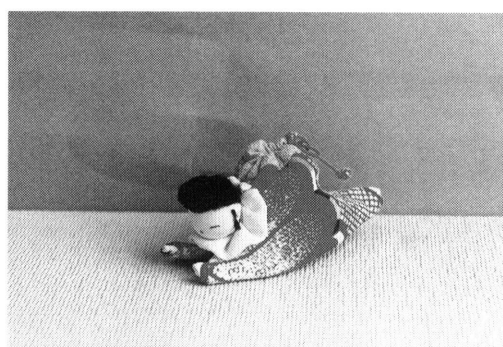
[写真18]



[写真19]



[写真20]



[写真21]

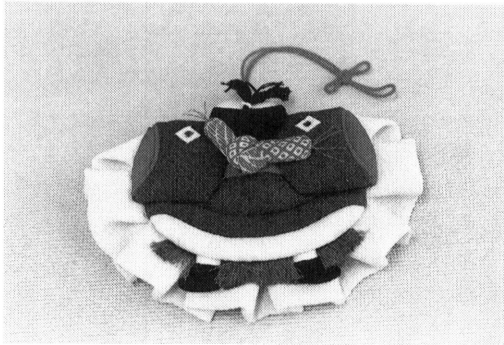
- 4) 袋物 …… 四角形や六角形などの彩りの小さな端切れを縫い合わせて作る袋物は、日本の伝統のパッチワークともいえる。市松袋、六角つなぎ袋、菱つなぎ袋、編み籠袋、花かご袋、金平糖袋、七宝袋、はぎ袋、ねじ袋、茶壺形巾着袋、宝袋など工



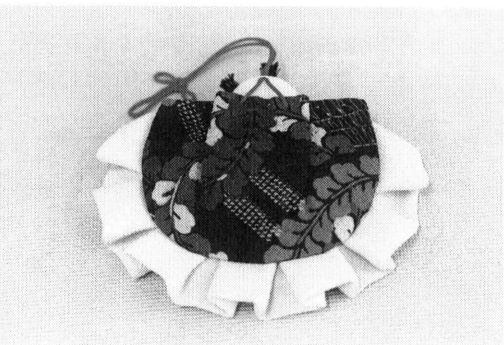
[写真22]



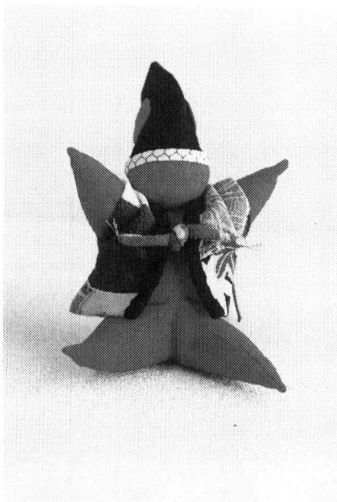
[写真23]



[写真24-1]



[写真24-2]



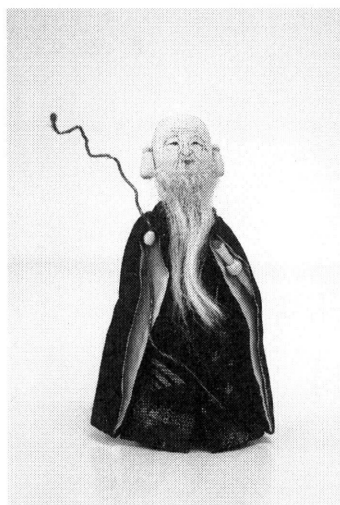
[写真25]



[写真26]



[写真27]

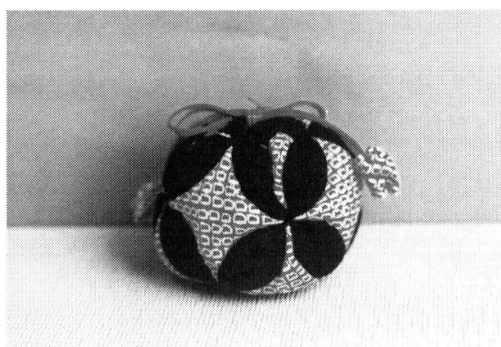


[写真28]

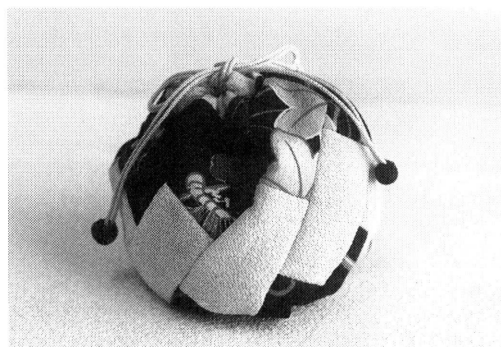
夫された斬新な模様が織りなす数々がある。わが子の無事な成長を願い、悪疫を払って、魔除として作られたお守り袋もある。一針一針親の思いが込められている。袋物ではないが、お手玉として作られたものも加えたい。[写真29～37]



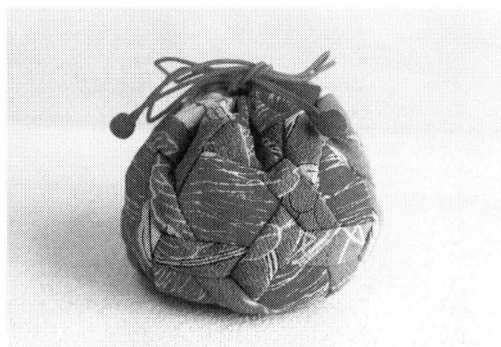
[写真29]



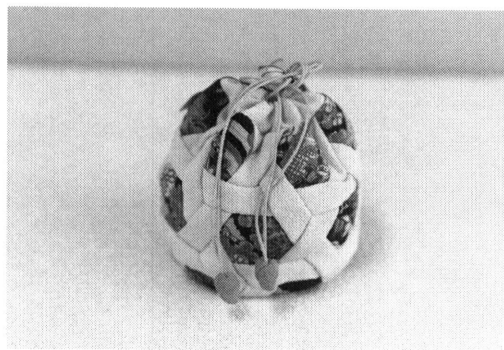
[写真30]



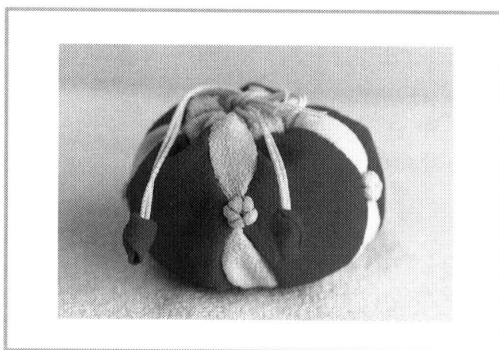
[写真31]



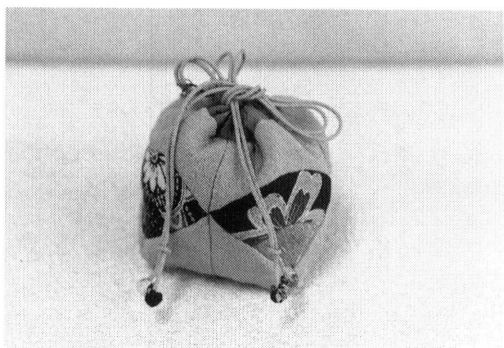
[写真32]



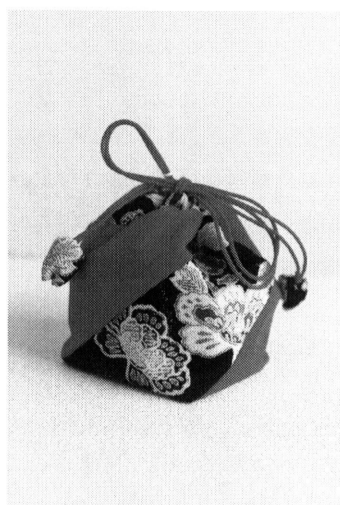
[写真33]



[写真34]



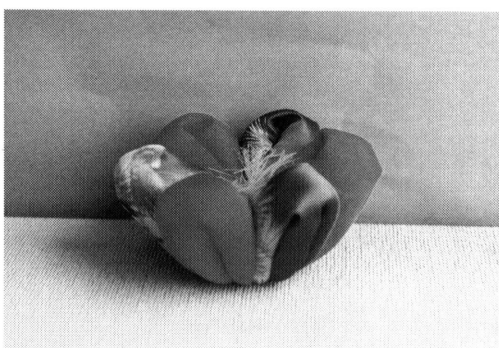
[写真35]



[写真36]



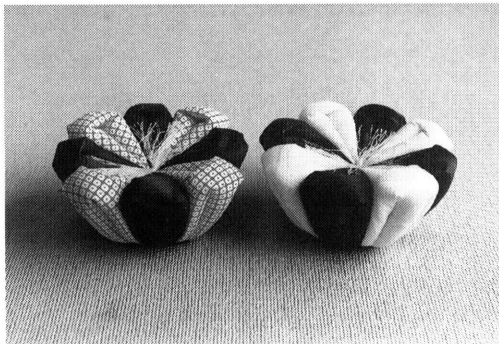
[写真37]



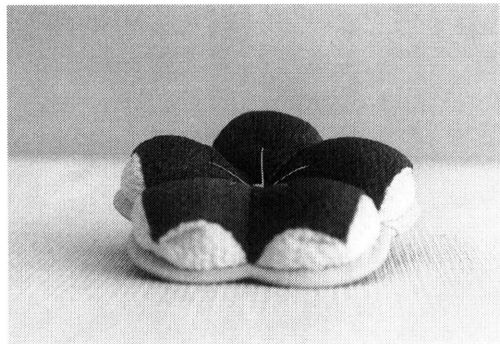
[写真38]

5) その他 …… 針山やお鈴台、そして肘付きがある。[写真38～40]

以上のように伝承されながら、これら数多くの作品が生み出され、作り続けられてきた。現代の我々の目に触れ新たな感動を呼ぶ。これらの作品の陰には、仕立て上げる技術の他、用布



[写真39]



[写真40]

や道具類、縫い方にも工夫が凝らされてきたからこそ、素晴らしい作品を生み出す原動力となったのであろう。これらについては今後の課題としたい。

2. 当館の収蔵資料〈お細工物〉〈指導教本〉

お細工物として登録されている資料は、今回扱ったちりめん細工の他、楊枝入、櫛入、鏡入、キセル入、名刺入、財布、巾着のような身に付ける小物から、祝い飾りなど用途の幅も広く種類も多い。しかし昭和以降の既製品も含まれているので、今回の対象から除外することにした。

本文で扱った「お細工物」は、東京家政大学の前身東京裁縫女学校、および東京女子専門学校時代の女学生たちが残したちりめん細工を主にした作品と、昭和に入ってから復元した数点を加えたものである。

〈お細工物〉1)～5)の5項目に分け、資料の登録番号と製作年代を記入し、なお不明な年代のものも資料カードに記載されているものから判断して、おおよその年代を記入したものもある。

1) 23点

花	項目	登録番号（製作年代）	点数
1	桜	411（明治30年） 415（明治30年） 10578（昭和初期） 11970（昭和23年）	4
2	桔梗	417（明治30年） 10581（昭和半ば） 11969（昭和23年）	3
3	蓮		0
4	菖蒲	416（明治30年）	1
5	あやめ	10576（昭和初期）	1
6	椿	10220 10577（昭和初期）	2

7	梅	10571 10575 (2ヶ)	3
8	向日葵	13879 (昭和23年)	1
9	柿	422 (明治30年) 11948 (大正初期)	2
10	いちご	882 (大正8年)	1
11	ほおづき	418 4323 10574 10738 11971 (昭和23年)	5

2) 24点

動物	項 目	登 録 番 号 (製 作 年 代)	点数
1	鶴	404 (明治30年) 881 (大正8年) 11545 13875 (昭和23年)	4
2	鶯	406 (明治30年) 13881 (昭和23年)	2
3	鶏	407 (明治30年)	1
4	蝶	408 (明治30年) 410 (明治30年)	2
5	鼠	409 (明治30年)	1
6	馬	6249 (明治初期)	1
7	鳩	6250 (明治初期) 10764	2
8	蝉	10767 16324 (2ヶ)	3
9	ひよこ	4320	1
10	うさぎ	405 (明治30年) 4321 13880 (昭和23年)	3
11	雀	13882	1
12	金 魚	10768	1
13	伊勢海老	13000 13876 (昭和23年)	2

3) 18点

人形	項 目	登 録 番 号 (製 作 年 代)	点数
1	這々人形	412 (明治30年) 414 (明治30年) 6248 7299 10579 (昭和初期3ヶ) 10765 10766 11947 (大正初期) 12998 (男児) 12999 (女児)	12
2	人 形	879 (大正8年)	1
3	福祿寿	3797	1
4	三番叟	10762 10763	2
5	猿三番叟	11972 (昭和23年)	1
6	奴	13001	1

4) 17点

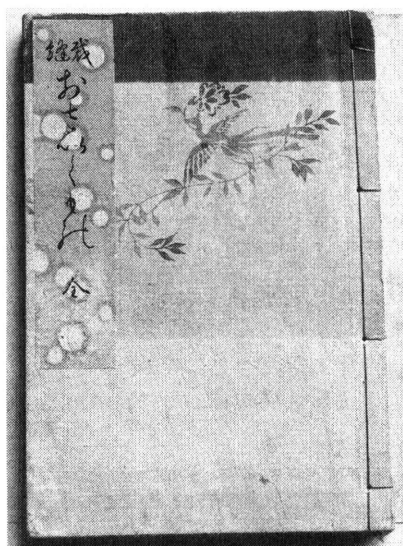
袋物	項 目	登 録 番 号 (製 作 年 代)	点数
1	巾着袋	10573 (昭和初期、大小) 10580 (昭和半ば、3 ケ) 10761 11963 11964 11966 11967 11968 11973 13877 13878 (いずれも昭和23年) 14949 (2 ケ)	16
2	誰が袖	11445 香袋 (14ケ)	1

5) 17点

その他	項 目	登 録 番 号 (製 作 年 代)	点数
1	肘突き	570 (明治30年) 11130 (昭和15年) 11132 (昭和15年) 14953 (平成10年) 15640 (昭和13年) 15641 (2 ケ)	7
2	お鈴台	1407 (大正7年) 1408 (大正7年) 10369 10370 14894 (昭和23年2 ケ) 14952	7
3	お手玉	11851 (平成3年4ケ1組) 14950 (平成10年3ケ1組)	2
4	針山	14948	1

〈指導教本〉指導教本として一番使用されたとと思われる4冊を記載した。[写真41～44]

1. 「裁縫 おさいく物」全 著者 共立女子職業学校教師 三名共著 伊藤 文子
小川 錠子 高田 久子 東京 大倉書店 明治42年



[写真41]



[写真42]



[写真43]



[写真44]

2. 「独習自在 裁縫細工物全書」 著者 岡本 政子 大学館 明治37年
3. 「高等女芸 おさいく物極意」 著者 梶山 彬 文友堂書店 大正11年
4. 「新案 裁縫小物全書」 著者 女子手芸普及会 代表 木村 俊秀 東京 大倉書店 大正13年

結 び

お細工物のバイブルともいえる明治から大正にかけて出版された指導教本（2.当館の収蔵資料に記載）と共に、女学生の作品が資料として東京家政大学博物館に収蔵されている。

これらの作品をひとつひとつ手にとって見ると、どれも苦心と努力と工夫の跡が如実に現れていて、作品の素晴らしさに驚かされた。

テーマは、(1) 自然を折り込み、季節を大切にする心。(2) 子供の成長を願う気持ちを表現。(3) おめでた尽くしや魔除けなど、より生活に変化と向上を促し、生活習慣を折り込んでいる。(4) 遊び心も加わり、時代のゆとりさえ感じられる。そして、そこには必ず用と美をもち、観察力と表現力にあふれていた。

これらの作品群が生み出された時代背景を探るべく「渡辺学園百年史」を紐解いてみると、明治初頭の教育実態は寺小屋や私塾が中心ではあるが、教育普及の大きな力になっていた。しかし就学率はまだまだ低く、特に女子は男子の二分の一にも達していなかった時代である。

このような情勢の中で、明治14年和洋裁縫伝習所（東京家政大学の創立）を開設した渡辺辰五郎翁は、独創的な裁縫教授法をもって女子教育を始めたのである。

「普通裁縫算術書」明治14年版によると、科学的かつ合理的思考に基づいて、家庭を経営、統合する能力を備えなければならないことを説いている。問題、算式、解説の順序により技芸を習得しつつ、自らものを思考する訓練法である。

このような教育理念が、生徒が先生の言うこと一字一句暗記するではなく、自分で考え出すこと。新しいことを生み出せる素晴らしさが、女生徒たちの心に深く浸透していったと思われる。明治教育の中枢であった家政学の根幹を占めると考えられていた裁縫手芸は、単に技芸の習得に終らず、世の中の社会要請にそって、教員志望者を多く輩出させるまでに教育の地盤を広げていった。

人間の営みは、気候風土の違いはあっても、どの民族も衣食住とは切っても切れない大切な事柄である。布で仕立てた物の端切れを集めておいて、それらを縫い合わせたり、組み合わせたり再利用は当然のことといえる。

アメリカやアジア各国、そしてシリアにも端切れを模様にした小物入れや装飾品などが作られていて生活を豊かにする脇役となっている。最近では観光客向けのお土産品として端切れを生かしたこのような品々はお国柄も感じられる色彩豊かな小物類として世界中の人々に親しまれている。

しかし、この極小の世界である“お細工物”のように立体的かつ美的に洗練された心のこもった手芸作品はどれにもひけを取らない。世界に誇ることができるちりめんお細工物である。

現代の女子学生が興味を示した、この手の中に入るほどの可憐な“お細工物”の流行は、時代背景に大きく影響していることを実感した。明治から大正の女学生の作品に、平成の女子学生が復元したり改良を加えて創作した新しいお細工物が加わり収蔵庫に沢山保管されることを期待したい。

引用資料

- 1) 梶山 彬著 「高等女芸 おさいく物極意」交友堂書店 1922 1頁

参考文献

- 1) 井上 重義：伝承の布遊び ちりめん細工 NHK出版 1994
- 2) 花房 昌吉：ちりめんのお細工物 文化出版局 1990
- 3) 渡辺学園百年史 渡辺学園 1981
- 4) 日本玩具博物館：館報 開館20周年記念報 1991, 1994, 1995, 1997.

追 記

平成17年春より、東京家政大学博物館の常設展にて「裁縫お細工物」を公開しています。